

「人間の教育」における

F・フレーベル(F. Fröbel)の「劳作」観

小 高 晋 二

本稿は、フレーベル(F. Fröbel)の「人間の教育」(Menschenziehung, 1826)から、彼の「劳作」についての考えをとり出し、これを考察することを目的とする。

結論的に言えば、

- (1) フレーベルの「劳作」には、すべての事物のあらゆる創造活動が含まれるということ、
- (2) フレーベルは、その「劳作」を人間の使命として捉えていたということ、
- (3) つまり、フレーベルは、「劳作」を通してこそ、人間は自己の本質を表現することができ、また認識することができると考えていたということ、
- (4) しかも、フレーベルは、その「劳作」という表現を意識して、独自の、個別的に表現することを主張していたということ。このことは、フランクルの実存分析的考えと類似した点をもつものであるということ、
- (5) また、フレーベルは「劳作」というものを経済的側面からだけ捉えるということはしなかったということ、

- (6) 以上のようなフレーベルの考えは、現在の教育を考える場合にも十分に示唆を与えるものであるということ、である。

1

まず最初に、「人間の教育」にあつて、「劳作」という語によって総括することができると思われる有形・無形の事象の内容を、明らかにすることから論を進めていきたい。

さて、フレーベルによれば、すべての事物には、「その本質を發展させながら表現する」^(注1)という使命が課せられているということであるが、結論的にいえば、まさに、この「その本質を發展させながら表現する」ということ、別の表現では、「内なるものを外なるものにする」^(注2)ということ、これが、「劳作」という語によって総括することのできる有形・無形の事象の内容であると考えられる。

というのは、フレーベルにおいては、植物が花を咲かせ、鳥がさえずること、また、幼児が遊戯をすることも、人間が創造活動をすることも生産活動をすることも、等しく、その本質の表現、すなわち「内なる

ものを外なるものにする」という働きとして捉えられていると考えられるからである。

フレーベルはいう。「野の百合が、人間からみれば働くことのない野の百合が、栄華をきわめたときのソロモンよりも、いつそうきらびやかに、神によって、粧われているのである。いったい百合は、葉をだし、花を咲かせないであろうか。百合は、どんな現われ方をする場合でも、神を告げ知らせ、神を表現し、神の本質を表現することがないであろうか。空を飛ぶ鳥たち、かれらは、人間から見れば、なるほど、種子を蒔くこともないし、人間の考えからいえば、働くものでもない。しかし、かれらが囀るとき、かれらが巣をつくるとき、かれらは、それぞれの表現を通して、すなわち幾百幾千というさまざまな行動を通して、精神を、神がかれらのなかに賦与した生命を、表現していないであろうか」^(注3)。

「遊戯とは、すでにその言葉自身も示していることだが、内なるものの自由な表現、すなわち内なるもののそのものの必要と要求に基づくところの、内なるものの表現にほかならない」^(注4)。「神は、人間を創造して、これに神の像を与えた。それゆえ、人間は、神と同じように創造し、同じように活動しなければならない。すなわち、かれの精神つまり人間の精神も、まだ形式を与えられていないものや形体を与えられていないものの上に漂い、それを動かして、形体と形式が現われてくるように、すなわち存在と生命を自身のなかに担うものが現われてくるように、働きかけなければならない。これこそ、われわれが全く真の意味において、またはっきりと特徴づけてよぶ場合の、労働と勤労 (Arbeit und Arbeit-

samkeit) との、働くことと作ることとの、高い意味であり、深い意義であり、また偉大な目的である」^(注5)。

つまり、フレーベルは、鳥が空を飛び、百合が花を咲かせることも、幼児が遊ぶことも、人間が、創造活動をし労働するのも、内なるものの外なる表現という観点から、同一の内容をもつ事象として解しているのである。

従って、通例からすれば、「ほねおりはたらくこと、あるいは、人間がその生活に役立つように手、脚、頭などをはたらかせて自然質料を交換させる過程」^(注6)、また、「なんらかの形で経済的目的にむけられる努力」^(注7)

さらに「人間がその自然との物質代謝を、彼自身の行為によって媒介し規制し、調整する過程」^(注8)が、労働という語によってあらわされているわけであるが、フレーベルは、そのような人間の何らかの意味での経済的な行為のみならず、また、動植物の単なる生命活動も、ともに内なるもの、外的な表現として捉えているということである。つまり、「労働」という語は、単に人間の「労作」、すなわち、生産活動を含む内なるものの外的な表現のみならず、動植物の諸活動を含むあらゆる表現活動と理解されるのである。

もちろん、このように広義に「労作」という語を用いることは一般的ではないであろう。なぜなら、人間以外のものの活動を「労作」という語によって表わすのは奇異な感じを与えるだろうし、また、人間における「労作」を問題にする場合においても、それは人間の活動の限られたものであると思われるかも知れないからである。しかしながら、フレー

ベルにおいては、前述のように、あらゆる事物のあらゆる表現活動が、その内的本質の実現として把握されているので、ここでは、あえて「労作」¹¹という語を用いることによって、それらの諸活動を総括するわけである。

2

さて、フレーベルによれば、後に引用するように、すべての事物は、それぞれ各々の使命 (Bestimmung)、職分 (Beruf) というものを持っており、人間は人間としての特殊な使命、職分というものを持っているということである。そしてその人間の使命に関しては、フレーベルは、次のように述べているのである。「内なるものを外なるものに、外なるものを内なるものにする」と (Innerliches äußerlich, Äußerliches innerlich zu machen)。¹² および、この両者の統一を見い出すこと、これが人間の使命が表明される一般的な外的な形式である。¹³ あるいは、「神および自然の子としての人間の使命は、神と自然の本質を、自然的なものと神的なものを、地上的なものと天上的なものを、有限なものと無限なものを一致させて表現することにある」。¹⁴

つまり、フレーベルは、人間の使命というものを、「内なるものを外なるものにし」「外なるものを内なるものにする」という二つの側面から捉え、しかも、人間がその二つの側面に作用する構造的連関とも言うようなものを見い出すことをもって、その使命が達せられるとしたのである。また、フレーベルは、人間の使命というものを、人間が外的自然

的なものと、内的・神的なるものとの一致調和においてこれを表現することと解していたのである。

ところで、この「内なるものを外なるものにする」ということは、どういうことなのであるうか。それは、ボルノー (O.F. Bollnow) によれば、人間が自己自身を外的に可視的な形態において実現することであり、その固有の本質を明白に表現するということなのである。¹⁵

ただ注目すべきことは、フレーベルは、「内なるものを外なるものにする」、「表現する」ということを、ただ単に表現する、外的に表現すると考えていたのではないということである。つまり、フレーベルがここにおいて「表現する」(sich darstellen) というとき、それは表現する主体が最も、独自の、かつ 個性的に、(am eigenlichsten und persönlichsten) 自己を表現することを最も肝要なことと考えていたということである。フレーベルはいう。「親の子であると共にまた家族そのものの一員としての子どもたちが、それぞれ、最も完全に、最も明白に、また最も全面的に、しかも最も、独自の、かつ 個性的に、自己自身を發展させ、表現するとき、かれらは、親の子として、また家族の一員として、両親および家庭の本質——(中略)——を最も明瞭にまた最も完全に發展させ、表現する。同様に、神の子および人類の一員としての人間もまた、それぞれの個々人、それぞれ個々の子どもが、最も、独自の、かつ 個性的に、自己を形成し表現するとき、神および全人類の全本質——(中略)——を最も純粋に、最も完全に表現する」。¹⁶ (傍点筆者)

この「独自のかつ個性的」表現ということは、フレーベルの思想を理

解する上において、かなり大切な点を含むものと思われるが、ここではただフレーベルが「独自のかつ个性的」表現こそ、最も純粋な最も完全な表現であると述べていたということに言及するにとどめておきたい。

次に、「外なるものを内なるものにする」ということであるが、これは、人間が外的に見出しただけのものを、ただ外的にそのまま放任しておくのではなしに、内的に自分のものとするということであろう。そしてこの内的にするということは、人間の意識に課せられたものと考えられるのであるが、本節では、この二つの側面をもつと考えられる人間の使命のうち、「内なるものを外なるものにする」ということについて考えていきたい。

さて、フレーベルによれば、「すべてのものの使命および職分は、そのものの本質を、従ってそのもののなかにある神的なものを、それゆえ神的なものそれ自体を、発展させながら表現することであり、神を外なるものにおいて、過ぎゆくものを通して告げ顕わすことである。認識する存在、理性をもつ存在としての人間の特殊な使命、特殊な職分は、人間の本質を、人間のなかにある神的なものを、従って神を、さらに人間の使命や職分そのものを、十分に意識し、生き生きと認識し、明確に洞察することであり、さらにそれを、自己の決定と自由とをもって、自己の生命のなかで実現し、活動させ、顕現することである」^(注14)。従って、このフレーベルの言葉からすれば、まず、人間は他の事物とは異って、人間は人間としての特殊な使命をもつ固有の存在であるということである。そして、その人間に課せられた特殊な使命とは、人間が人間に固有の本

質を意識し、認識し、自己の決定をもってそれを実現するということがある。つまり、事物の場合においては、その固有の本質を、ただ単に過ぎゆくもの、外なるものにおいて完全に表現し、実現しさえすればよいわけであるが、しかし、その場合、事物は自己の本質を意識し、認識することはないのである。そうであっても、事物の場合においては、それらの事物が十分にその本質を表現しているかぎり、それらの使命というものとは十分に達せられていると考えられるわけである。

しかし、人間の場合には、ただ単にその固有の本質を実現するというだけではその固有の使命が十分に達成されたということにはならないのである。人間の場合、真にその固有の使命が達成されたとされるためには、人間は、さらに、その固有の本質を十分に意識し、認識し、しかも自己の決定をもってそれを実現しなければならないのである。その時にこそはじめて、人間は人間として、その固有の使命を十分に達成したことになるのである。それゆえ、フレーベルが、子どもを保育する母親に言及しつつ、「なにも教えられなくとも、また、なんらの要請も受けずに、さらに、どんな学習も経ずに、生みの母は自然に自らこのことを行っている。しかし、これでは十分でない。彼女が意識的な存在として、意識的になりつつある存在に働きかけながら、しかも、意識して人間の連続的な発展に導くべきものとして、一定の内面的な生きた、意識された連関、(Zusammenhang)のなかで、およびこの連関をもってこれを行うことが必要である」^(注15)というのも、今述べたように、フレーベルが人間に固有の意識の重要性を認識していたからにはかならないといえる

であろう。

従って、フレーベルは、人間の使命の一側面である「内なるものを外なるものにする」ということを二重の使命として捉えていたと考えられる。すなわち、ひとつは、すべての事物に課せられた一般的使命としてのそれ、つまり、それに固有の本質を実現すること、精神的なるものを可視界において現実化すること、広義における表現ということである。^(注16) もうひとつは、他のすべての事物から人間を区別するものである意識に関することであり、それは、他のすべての存在が知らずに実現するものを意識をもって、実現することである。^(注17)

このように、フレーベルにおいて、「内なるものを外なるものにする」ということは、人間の場合、彼がその固有の本質つまり精神的なるものを、意識をもって、彼の環境世界において、外的な作業や行為において表現する、実現するということの意味するのである。

以上のように、フレーベルが意識をもった表現ということを強調しているということ、また、前に述べたように、表現というものを独自の、個別的表現こそ完全な表現として把握していたということは、彼の考えがすぐれて現代的であるということ、つまり、今なお新鮮さを失っていないものであることを示すものだろう。

従って、今日のような、詰め込み主義、個性抜きの一主義、知育偏重主義、暗記中心主義と言われる教育の反省としてこの「人間の教育」を再読することは価値あることであると考えられる。

3

ところで、人間の使命の一側面である外的に表現するということを、一応上述のように理解した後で、さらに、この外的に表現するということをもう少し詳しく検討してみよう。

結論的に言えば、この外的に表現するということには、二つの意味が含まれるということである。すなわち、そのひとつは、外的に表現することを通して自己の本質を実現すること、もうひとつは、この外的に表現されたものを通して自己を認識することである。従って最初に、外的に表現するということを通して自己の本質を実現するということから具体的にみていきたい。

フレーベルによれば、例えば、植物である百合や、動物である小鳥の場合には、それぞれ、百合の場合であれば、花を咲かせ匂いを発散させるときに、また、小鳥の場合であれば、空を飛び、さえずり、あるいは巢を作るときに、それぞれは自己の固有の本質を外的に表現し、それらの表現活動、生命活動を通して、それぞれはその固有の使命を顕現している^(注18)とされるわけであるが、人間の場合においては、その固有の本質を表現する^(注19)ということは、どのようなときに妥当するのであろうか。

フレーベルはいう。「遊戯すること (Spielen) ないしは遊戯 (Spiel) こそが幼児の発達段階における最高のものであり、遊戯こそ内なるものの自由な表現であり、内なるものそのものの必要と要求に基づくところの内なるものの表現である」^(注19)。

「少年たちにおいては、その多くの外的な行為や営みが少年たちの内面的、精神的な生命を示すものである」^(注20)。

「われわれが、内なるものを外に表現し、精神的なものに身体を、思惟されたものに形象を、不可視的なものに可視的な性質を、永遠なものすなわち、精神のなかに生きるものに有限で一時的な外的存在を与えるのは、勤勉(Fleiß)や勤労(Arbeitsamkeit)ないし働き(Wirken)や行為(Tun)を通してであるという明確な思想を伴っているところのありはまた、そのきわめて微かな予感だけでも、いや単にその直接的な生き生きとした感情だけでも伴っているところの勤勉や勤労を通してこそ、そのような働きや行為を通してこそ、われわれははじめて真に神に似るものになるのである」^(注21)。

これらのことからして、フレーベルは、人間に固有の内なるものの外への表現、実現は、例えば、幼児においては、彼が遊戯するうちに見い出され、また少年においては、彼の外的な活動のうちに、さらに一般的にいうならば、そのような表現は、勤勉さや働きや行為のうちに実現されるものと考えていたと解されるのである。しかも、フレーベルの場合内なるものを外的に表現するにあたって、場所や時や地位や職業が要求するような仕方では、行為や作品や形態や素材にそくしながら、表現し、実現することが肝要なのである。^(注22) それゆえ、「精神や生命は、自分が創造し、産出し、表現するすべてのものに、自分の本質を刻みつけ、植えこまなければならないし、自己が表現するすべてのものに、いわば、朝の贈物として、自己の本質を持たせなければならない、精神や生命は、自

己の表現するすべてのものに対して、しかも表現されたもののあらゆる部分に、自己の印章を押せなければならない」と、フレーベルはいうのである。

次に、「内なるものを外なるものにする」ということのもうひとつの面である、外的に表現されたものを通して自己を認識するというに移るわけであるが、その前に若干、フレーベルの認識についての基本的な考え方について触れておきたい。というのは、それに触れることによって、外的に表現することと自己認識との関係がより明らかにされると考えられるからである。

さて、フレーベルによれば、それが何についての認識であれ、認識されるものは、認識する主体との関係からすれば、必ずや対置あるいは比較などの関係において考察されるということである。例えば、フレーベルが、「対立するものを通しての事物の認識という法則に従って……」^(注24) あるいは、「それぞれの事物の存在が、いやすべてのものが認識されるのは、それが反対の性質をもつものに結びつけられたり、反対の性質をもつものとの合一や一致や同等化が見い出されたりする場合だけである」^(注25) というのも、また、「少年は、自分の仲間のなかで自己を感じたり評価したり、さらに仲間を通して自己を認識したり、仲間を通して自己を発見しようとする」^(注26) と述べているのも結局、上述のような観点からであると思われる。

それゆえ、人間の自己認識についても、同様のことが言えるわけである。フレーベルは言う。「内なるものはすべて、外なるものにおいて、

外なるものを通して、内側から認識される。事物および人間の本質や、精神つまり神的なものは、そのもろもろのあらわれた姿において認識される^(注27)。つまり、人間の本質の認識は、外的に表現したものを内側から対象として認識することによって為される、また、自己自身の認識は、自己から自己の本質ともいべきものを分離し、それを見つめ直すことによって為されるということであろうが、これについてのフレーベルの説明をもう少し見てみよう。

フレーベルは言う。「それぞれの事物が内面的にも、外面的にも、あまり自分に接近しすぎると、人間には、その事物を、ないしはその事物の内なるものを認識することが難しくなる。その事物が人間に外面的にも、内面的にも接近しすぎればしすぎるほど、その事物が外面的にも、内面的にも人間と近い関係にあればあるほど、だいたいそれに比例してその認識が困難になる。――(中略)――。それゆえ、人間が自己自身を認識することは一般にきわめて困難である。それに反し、外的な分離は、しばしば内的な合一や、内的な発見および認識をもたらす^(注28)」。従って人間は、「自分自身をほんとうに認識しようと思うならば、人間は自己自身を自己の外に表現しなければならない。いわば、自己を自分自身に対置しなければならないのである^(注29)」。すなわち、人間が自己自身を、自己の本質を認識したいと思うならば、人は自己の本質を自己から分離して外的に表現しなければならないとしたのである。これは、換言すれば人間は、自己を概念によって把握するのではなしに、表現において、表現を通して把握するということであろう^(注30)。つまり、フレーベルは、すべ

ての認識に先立つべきものとして、行為することを考えていたといえるのである。従って、フレーベルは、行為を媒介としての分離と再結合という弁証法的関係^(注31)による認識の発展を強調したものと考えられる。フレーベルはいう。「これを為せ、そして、この特定の関係において、汝の行為から何が結果し、それがいかなる認識へ汝を導くかを見よ^(注32)。これらのことからして、フレーベルは、為すということを、直観よりも、思惟よりも本源的なものと看做したといえる^(注33)」。

以上において、一応、フレーベルにおける人間の使命の一側面としての「内なるものを外なるものにする」ということ、換言すれば、表現し遊戯し、活動し、創造し、行為するということも考察してきたわけであるが、これを逆に言えば、表現し、遊戯し、活動し、創造し、行為するということこそ、まさに人間に課せられた使命であるということである。そしてそれは、一面においては、万物に課せられた使命としての自己の本質の顕現であるとともに、人間にあっては、意識をもってしての表現であり、さらに、他面においては、人間のみに課せられたものと考えられる自己認識の方法としての外的表現ということとして理解される。

なお、この後者の面である、自己認識の方法としての外的表現ということについて、ボルノーは、フレーベルのように、人間は直接の洞察によって自己自身についての固有の内面を経験するのではなく、人間はその固有の本質を外的な作業において実現することにおいてこそ認識するのであるという見解を、ディルタイ(W. Dilthey)の自己理解の理論と相接触するものであると指摘している^(注34)。

ところで、このようなフレーベルの人間の使命についての見解を見る
とき、それが、フランク (V. E. Frankl) の言う宗教人 (homo
religiösus) というものについての見解、また彼の生命観、といったも
のと非常に類似した点を持つことを指摘できると思う。と言うのは、フ
ランクの場合、宗教人というのは、自己の生命を単に所与として受け
とるのではなく、それを責任をもって、意識をもって、使命として把
握し、しかも、その使命が、いわばある他から与えられたものであるこ
とを自覚し、その使命を課したある高次のものを体験する人間であり、
そして、その使命を委託されたものとして体験する人間である。そして
その場合、彼の生命は超越的な委託者をはっきりとめざしているという
ことであるが、^(注35) フレーベルにおいてもまた、人間にその使命の顕現、認
識を迫るとき、それは、正しくフランクの言う超越的な委託者から委
託された生命として、単に所与ではなしに、使命として把握することを
人間に求めているものと考えられるからである。すなわち、フレーベル
の場合においても、人間は使命づけられたもの (Der Mensch……
ist bestimmt)^(注36) なのである。

また、フランクによれば、生命の真の意味は、単に生命とは何かと
いう問として問われるべきではなく、生命の意味に関する問いは、いわ
ば人間がその問いを発するものとしてではなしに、生命自身によって人
間に提出されたものとして生命に答えるべきものであるということであ
る。しかもその答えは具体的に答えられねばならず、人間の実存の中に
おいて、その固有な問いへの答えを実現するのであるということであ

^(注37) つまり、生命の意味は、ただ単に問われるべきものではなく、われ
われが生命に責任をもって答えるという意味において答えられるべきも
のであり、その答えは常に言葉ではなしに行為によって与えられるべき
であるということである。またそれは、状況と個人の具体性に応じたも
のであり、真の答えは行動的な日常の具体性における答えであるべきだ
ということである。^(注38) 再言すれば、フランクの場合、重要なことは、こ
のような答えがいつも実際に、すなわち行動において、与えられるよう
な答えであるということであり、この返答が現存在の責任において生じ
てくるということである。^(注39) フレーベルにおいても、行為し、外的に表現
するということは、まさしく人間の使命であり、為さるべきその行為
は、前述したように、時や場所や地位が要求するような具体的な形にお
いて為さるべきものである。しかも個性的に意識をもって為さるべ
きものなのである。

従って、フレーベルにおける人間の使命の一側面としての「内なるも
のを外なるものにする」ということと、フランクのいう生命への答え
としての「行為」ということは一脈通ずるものと考えられる。

前述したところにおいては、フレーベルの「内なるものを外なるもの
にする」ということ、具体的には、人間の行う何らかの活動、遊戯し、
創造し、生産することなどを、人間の使命の一側面の顕現として捉えて
きたわけであるが、ここでは、そういった「労作」の中から主として労

働といわれるものについてのフレーベルの考えを見ておきたいと思う。

これについてのフレーベルの見解が最もよく述べられていると思われる箇所を「人間の教育」の中に求めるとすれば、おそらく次の箇所ではないだろうか。「神は絶えまなく連続的に創造し活動し続けている。神の考えはそれぞれ一つの作品であり、成果であり、産物である。しかも神の考えはどれも創造する力によって生産し、表現しながら、作品と成果を創造しながら、永遠に働き続ける。――(中略)――。神の精神が未だ形式を与えられていないものや形態を与えられていないものの上に漂い、それを動かし、かくて、鉱物や植物、動物や人間が、形式や形態や、現実の存在や生命を得るようになった。神は人間を、神自身の模像を創造した。神は人間を創造してこれに神の像を与えた。それゆえ、人間は神と同じように創造し、同じように活動しなければならぬ。すなわち、彼の精神つまり人間の精神も、未だ形式を与えられていないものや形態を与えられていないものの上に漂い、それを動かし、形態と形式が現われてくるように働きかけねばならない。これこそ、われわれが全く真の意味において、またはっきりと特徴づけてよぶ場合の労働と勤労 (Arbeit und Arbeitsamkeit) との、働くことと作ること (Wirken und Schaffen) との高い意味であり、深い意義であり、また偉大な目的である」^(注40)。また「神は、有限なものにおいて、自己を告げようと欲したのであるから、有限なものや過ぎゆくものを通してしか、また有限なものや過ぎゆくものにおいてしか、自己を告げることができなかったのであろう」^(注41)。

要するに、フレーベルによれば、神が絶えず連続的に創造し、活動することによって万物を創造するように、また、神が有限なものにおいて有限なものを通してしか自己を顕現しないように、神の似姿としての人間もまた、有限なものにおいて、有限なものを通して、絶えず連続的に創造し、活動しなければならないということである。ただ人間の場合にはそれを自覚的に意識をもって行わねばならないわけである。つまり、フレーベルの場合には、労働することを、活動すること、また何かを創造することをも含めて、ただ単に経済的側面から捉え、身体を保持するためのものとするような考えはしないのである。

フレーベルは言う。「人間が労働したり活動したり創造したりするのは、単に身体つまり精神の外被を保持するためだけ、すなわち、衣食住を確保するためだけであるという思想というより妄想は、人間の品位を汚すものであって、われわれはせいぜい我慢できるぐらいのもので、とてもそれを流布したり伝播したりするわけにはいかない。いや、人間が創造活動を営むのは、もともと、また本来の姿から見れば、ひとえに、人間のなかにある精神的なものや神的なものを自己の外に形づくるため、およびそのことによって自己独自の精神的な本質や、神の本質を認識するためだけなのである。それによって人間が手に入れる食物や住居や衣服は、余分のものであり、とるに足りない付録である」^(注42)。

つまり、フレーベルの場合、労働し、活動することそれ自体のうちにこそまさしく労働し、活動することの意義があり、そしてそれが人間の自己実現と自己認識とにとっての欠くべからざる方法でもあるのである。

また、フレーベルの場合には、人間が自己の生命を保持するに必要なものはすべて、人間が自己の生命のうちにおいて、自己の生命を通して、自己の内にある精神的なるものを外的に表現するときに、自ずから人間に与えられるものである。^(注43) 換言すれば、人間が自己の本質をそれぞれの要求に従って、またそれぞれの行為にそくして外的に表現するときには、人間は自己の生計について心配する必要がないのである。^(注44)

従って、これを逆にとらえれば次のようになるのである。「もし人間が、生涯のどこかの時期で——その遠近早晚にはかわらず——、神の力としての彼の力を自己の外に形成したり、それを作品に高めたり、あるいは、少くとも作品や行為を目指してその力を展開したりすることを怠るようなことがあれば、彼はいつか欠乏に見舞われることになるであろうということ、および彼がその力を発展させたり、作品に高めたりすることを怠る程度に应じ、彼は欠乏に見舞われることになるであろう。」

——(中略)——。なぜなら、われわれがそれに服して生きている地上ないし世界の法則に従えば、そのゆるがせにされた活動の所産がいつかは現われてこなければならない時期が当然くるに相違ないからである。とにかく、活動や勤労がなおざりにされて、どうしてそこに所産が生れようか。^(注45)

このようなフレーベルの労働についての考え方は、労働そのものを生活の自己目的とするというよりは、労働することを課せられた使命の顕現として、また労働することを、それを通して弁証法的に自己自身を認識するものとして捉えているところにその特徴をもつといえるであろう。

う。さらに、労働のもたらす経済的側面に関しては、これを第二義的に考えるところにもフレーベルの労働についての考えの特徴があると思うのである。

5

以上において、一応、フレーベルの「劳作」観そのものについての考察を終わるのであるが、最後に、フレーベルの実際のな「劳作」教育論に触れてこの小論を終えたいと思う。つまり、フレーベルは「劳作」というものを実際のな教育との関係において、どのように捉えていたのであろうかということである。

これについてまず第一に指摘しうることは、フレーベルが「劳作」(ここでは主として身体的労働)するということを教育において非常に重要視していたということである。

フレーベルはいう。「労働を通しての、および労働における学習、すなわち、生活を通しての、および生活からの学習こそ、何ものにもましてはるかに力強い学習であり、最も具体的な学習であって、それ自身において、またそれを受けるものにとっても、ますます生き生きと発展し続ける学習である」。^(注46) すなわち、フレーベルの場合、労働という要素は、生徒の学習にとって、また学校における教育にとって、欠くべからざるものであり、学習がただ単に頭を用いるだけの、何ら身体的動作、活動を伴うことのない学習だけであるならば、そのような学習は、彼にとって、人間の力を過少評価したものであり、決して人間の無限の力を

発達させることのない、いや、それどころか人間の無限の力を失わせしめてしまうようなものである。つまり、フレーベルは労働すること生活すること、学習することが一体となるような教育をこそ考えていたといえるだろう。

それ故、フレーベルは、その当時の家庭教育や学校教育を批判しつつ労働教育の時間を学校教育の中へもとり入れるべきことを声を大にして主張するのである。「現在の家庭教育や学校教育は、身体を動かしたがいらず、仕事を怠けたがるような方向に子どもたちを導いている。それでは人間の無限の力は失われてしまうことにさえる。もし現在の授業時間と同程度に正しい労働教育の時間が学校教育にとり入れられるようになれば、上述のような欠陥の是正にはきわめて効果的であろう」。あるいは「子どもたちないし人間は、形づくられないものや形をもたないものについては、現に、多すぎるほど学習^(注48)もし、勉強もしているが、労働については、それがほとんど見られない」。

勿論、このような労働という要素を教育の中にとり入れるというフレーベルの考えは、それ自体としては必ずしも新しいものではないことは言うまでもない。しかしながら、フレーベルが労働と教育との結びつきを主張する所以のものは、前述したように、一面においては、人間の使命の実現として、しかも意識をもってしての実現として、また他面においては、その実現されたものを通してその実現されたものにおいて自己を認識するというこの二つの面からの人間の自己形成という観点にあるものと考えられ、ここにフレーベルの「労作」教育論の特色があると思

われる。

さらに、フレーベルにおける「労作」教育論は、幼児期におけるそれに言及している点でもまた特徴的であると思われる。すなわち、フレーベルは、乳児や幼児の活動衝動、形成衝動に触れて、「地上に現われた人間、すなわち、いわば芽を出し、生長し始めた人間を、幼いときから外的な作品を作り出すための活動つまり生産のための活動を営むように育成するということ^(注49)」の重要性を説き、さらに、「いかなる階級、いかなる身分のものであろうと、毎日少くとも一時間ないし二時間は、ある定められた外的な作品の生産活動に真剣に没頭しないような幼児が、もっと後には、そのような少年や青年がいるようなことがあってはならないであろう^(注50)」とし、「早くから始めることが、宗教教育にとってきわめて大切であるのと同様に、真の生産活動のための、真の勤労のための教育も、早くから始めることがきわめて大切である^(注51)」と述べて、幼児期からの正しい労働教育の必要性、重要性を主張しているのである。

以上のようなフレーベルの考えは、前にも述べたように、現在の知育偏重的、記憶中心主義的といわれる教育の反省として尚多くの示唆を与えるものであろう。

注1 F. Fröbel: Die Menschenziehung, S. 32. (Friedrich Fröbel Ausgewählte Schriften, Herausgegeben von Erika Hoffmann, Zweiter Band, 1961.) 以下 M.E. と略す。尚、邦訳「人間の教育」荒井武訳、岩波文庫参照。

2 ibid. S. 16.

- 3 ibid. S.28.
- 4 ibid. S.36.
- 5 ibid. S.27.
- 6 広辞苑
- 7 哲学事典、平凡社
- 8 K.Marx : Das Kapital (Marx Engels Werke, Band 23) S.192
- 9 M.E., S.32.
- 10 ibid. S.18—9.
- 11 O.F. Bollnow : Die Pädagogik der deutschen Romantik, 1967. S.127.
- 12 M.E., S.19.
- 13 O.F. Bollnow : Die Pädagogik der deutschen Romantik, S.127.
- 14 M.E., S.7—8.
- 15 ibid. S.39.
- 16 O.F. Bollnow : Die Pädagogik der deutschen Romantik. S.125.
- 17 M.E., S.126.
- 18 ibid. S.18.
- 19 ibid. S.36.
- 20 ibid. S.71.
- 21 ibid. S.27—8.
- 22 ibid. S.28—9.
- 23 ibid. S.91.
- 24 ibid. S.33.
- 25 ibid. S.32.
- 26 ibid. S.31.
- 27 ibid. S.9.
- 28 ibid. S.57.
- 29 ibid.
- 30 Klaus Giel : Fichte und Frobel. 1959.
- 31 O.F. Bollnow : Die Pädagogik der deutschen Romantik.
- 32 M.E., S.16.
- 33 小林澄兄「勞作教育思想史」二六〇—一頁。
- 34 O.F. Bollnow : Die Pädagogik deutschen Romantik.
- 35 フランクル著作集・2「死と愛」(霜山徳爾訳)七〇—一頁。
- 36 M.E., S.73.
- 37 フランクル著作集・2「死と愛」(霜山徳爾訳)七三頁。
- 38 前掲書、一三二—三頁。
- 39 フランクル著作集・7「識られぬ神」(佐野利勝・木村敏訳)一一—二頁。
- 40 M.E., S.27.
- 41 ibid. S.72.
- 42 ibid. S.28.
- 43 ibid.
- 44 ibid. S.29.
- 45 ibid.
- 46 ibid. S.30.
- 47 ibid.
- 48 ibid.
- 49 ibid. S.29—30.
- 50 ibid. S.30.
- 51 ibid.